

『後拾遺和歌集』 「雑四」 の構造と特性

実川 恵子

はじめに

「雑歌」とは、『古今和歌集』の「仮名序」に「あるは、春夏秋冬にもいらぬくさぐさの歌をなむ、選ばせたまひける」とある如く、四季の部にも、また、賀、恋、離別、羈旅の部立にも入らない和歌を「雑歌」という部内に収容させたという意味である。

このような他の部立から、はみ出した和歌が、最後に集められて出来る「雑部」は反面、それゆえにある種の自由さを持ち、創作主体である撰者の新しい試みはこの雑部に示されたのではなからうかと考える。そして、その試みも種種相を繰り広げるのである。また、雑歌は、自然を対象として、それに働きかけ、そこから受け取る心情の吐露を詠う四季歌とは異なり、人間と人間の、人間と社会の関係における生活の根底から生まれるものである。そのような人間の精神史を詠うため、雑部が比較的、日常消息的色彩の濃い歌を集め、それだけに時代の

風潮をよく反映しているといっても良い。この雑部の分類意識をめぐる問題については、諸先学の成果があり、それらによりながらいくつかの問題について考察していきたい。

古代和歌史の終焉を迎え、中世世界への橋渡しとしての役割を持つ『後拾遺和歌集』（以下後拾遺集と記す）を形成している歌人たちの苦悩をも読みとることもできよう。自然と人生の雑多な裡に、無常観を主位に置き、それを現実の世界を貫く理念としている。この無常観は、撰者や歌人たちが抱く人生観であると共に、当時の時代通念でもある。このような思想は次第に宗教的な色彩が強くなつて、「神祇」、「釈教」部へと傾注されていく。後拾遺集では、この宗教性の発露を「神祇」、「釈教」を一部立として立てねばならなかった撰者の意図にも、この著しい宗教思想の浸潤を感じさせる。それはまた、宗教の季節といわれる中世の前夜にもあたり、この時代の精神を反映し、次第に吸引される特色として和歌史上から

も重要視されねばならない。

以上の観点から、後拾遺集の「雑部」全六巻のうち、「雑四」を取りあげ、その構成意識と特性について考察し、そこに包括された概念を抽出することで、撰者の意識や選集意図なるものを把握することが目的である。

まず、五十八首からなる「雑四」は、かなり明確な構成で排列されているように見える。それは巻頭に松十首を置き、続いて深山二首、名所二十三首（池一・浦一・滝四・川二・湯一・住吉九・歌枕七首）物詣八首、歌集に関する歌五首、日常贈答歌十首というように分類区分され、排列される。この中で「松」、「名所」、「歌集」の歌群は、それぞれ「松」は古今集雑上・拾遺集雑上、「名所」は古今集雑上・拾遺集上下、「歌集」は古今集雑下に類似した歌群が存在する。また、後拾遺集の全六巻の雑歌のうち、一から四巻までの雑歌の構成には、先行勅撰集の継承発展という性格が見える。しかし、それだけに終わらず、そこに置かれた雑歌の諸相を追ってみると、撰者通俊の雑歌編纂をめぐる新たな意識を看取することができるように思われる。

そこで、雑四巻に排された歌の特性について以下に考察していくことにする。なお、テキストは、『新編国歌大観』所収「後拾遺和歌抄」を使用し、表記については、改めたところもある。

一 巻頭の松歌群

この松歌群の排列は、前巻「雑三」の主題である人間の無常感や厭世観というものを受け、「雑四」の巻頭に永久不滅である人間の生命や、老いの諦念を主題としたことと関連させて、雑四巻頭に松を配置させることで、松の変わらない長寿とを対比させ、人間の感情の諸相を描きだそうとしている。

その巻頭に置かれた十首の松歌群は、その内容からおよそ四部に構成される。冒頭二首（一〇四一・一〇四二）は、名所の武隈の松を詠じた橘季通と能因法師の、

則光朝臣の供に陸奥国に下りて、武隈の松をよみ侍りける

武隈の松は二木をみやこ人いかがと問はばみきとこたへむ

陸奥国にふたたび下りてのちのたび、武隈の松も侍らざりければよみ侍りける

武隈の松はこのたびあともなし千歳をへてやわれは来つらん

である。巻頭の季通歌は、二木の武隈の松を見て、「二本」だが、都人がどうだったかと聞いたら「三木（見き）」と

答えようといった歌であり、俳諧的な要素をにおわせている。また、この歌を揶揄した僧正深覚歌（雑六・俳諧歌・一一九九）の「武隈の松はふた木をみきといふはよくよめるにはあらぬなるべし」が俳諧歌の二首目に載る。

次の能因法師の歌は、武隈の松の枯死し、無くなってしまうことに出会い、一種の無常感にも似た感慨に心を動かしている。これに続き、大江嘉言歌（一〇四三）は、詞書に「河原院にてよみ侍りける」とある、

里人のくむだにいまはなかるべし岩井の清水みくさみにけり

当歌は、河原院の荒廃を慨嘆した歌で、同じ河原院の岩井の清水を詠んだ、拾遺集卷三「夏」（一三二）に載る恵慶法師の、

松蔭の岩井の水を結びあげて夏なき年と思ひけるかなの第一句の「松蔭の」とあるのによつて、当歌は松歌群に排列されたものと考えられる。また、前歌とは名所の変貌ぶりを詠じている点で連接していると思われる。

また、当歌は、「今昔物語集」二十四卷、第四十六話に載る。次歌（江侍従・一〇四四）も、「おなじところにて松をよみ侍りける」と詞書して、

年へたる松だになくはあさぢ原なにかむかしのしるしならまし

とあり、昔を偲ばせる松の孤高さを詠じている。この歌は、拾遺集雑上の道済法師の「行末のしるしばかりに残るべき松さへいたく老いにけるかな」に拠るものとされる。また、当歌の作者の江侍従と河原院の繋がりについては、河原院・能因法師と縁を持つ侍従の娘少輔の父である藤原兼房との関係や江侍従が六人党の庇護者の存在の師房の乳母であったことから生じたものかという説もある。次の一〇四五歌（左衛門督の北方）も、人の変化と、年を経てもなお不変の古松を詠んでいる。

続く一〇四六（源為善）・一〇四七（馬内侍）は子の日の松を、続く一〇四八（師経）・一〇四九（資仲）・一〇五〇（御製）の三首は松の色が変わらない様と世の栄華の変わらないことを折る題詠歌で、一〇四八は「緑竹不知秋といふ心を」と詞書する五字の結題を詠じた歌合歌、一〇四九は「永承四年十一月九日内裏歌合」での詠で、能因法師（賀・四五二）の同じ歌合で詠じた、春日山岩ねの松は君がため千年のみかは万代ぞへむと番えて負けとなつてゐる。撰者通俊は当歌のように歌合で負となつた歌を本集に所々に撰入しており、何らかの通俊なりの識見を示したものと考えられよう。続く白河天皇御製の、「上ののをのこども松澗底においたりといふところをつかうまつりけるに」と詞書する、

岩代の尾上の風に年ふれど松のみどりはかはらざりけり
で、これら三首の題詠歌のように公的な色彩の濃い歌で、松歌群の最後を飾ったのは興味深いところである。「雑四」の巻頭から一〇首続いた松歌群はここで終わっている。

以上のように、前巻の「雑三」で強調されたテーマの、人間の無常・厭世観を受け、「雑四」ではまず冒頭にこのような松歌群を置き、永久不滅ではありえない人間の生命や避けることのできない老いの情感を描こうとしている。この松の変わらない長寿長命と対比させることで、人間の感情の種種相を詠んでいる。しかし、「雑四」巻では、前巻のあわれや無常、厭世観や死などという暗いイメージの編纂意図とは相違しているように思われる。

以上の松歌群に続く二首（一〇五一・一〇五二）は、深山を詠む。一〇五一は、藤原義孝の、

深山木をねりそもて結ふしづの男はなほこりずまの心とぞみる

は、木の枝や蔓を柔らかく練って、縄の代わりとした「練(む)り麻(そ)」という歌語が使われている。この語の勅撰集での用例は、拾遺集、恋三、躬恒歌(かの岡に秋刈るをのこ縄をなみねるやねりそのくだけてぞ思ふ)の二例のみで、この拾遺集歌について定家は「僻案抄」で

「この歌まねび詠むべからずとぞ侍し」と記している。この禁制からその後の用例は僅少する。義孝の、こうした目新しい歌語を用いて歌を詠む例は、本集、春下(一四九)の、「野辺見ればやよひの月のはつかまでまだうら若ささあたづまかな」の「さあたづま」にも見られる。ある意味で伝統的和歌観からの離脱の意図を示すものとも理合できよう。

続く一〇五二は、源経信の「宇治にて人々歌よみ侍けるに、山家旅寝といふ心を」と詞書する、

旅寝する宿は深山にとぢられてまさきのかづらくる人もなし

が置かれ、この歌は頼道の宇治山荘での歌合詠であろうか。古今集・卷二十・神楽歌・詠み人知らずの「み山にはあられ降るらし外山なるまさきの蔓色づきにけり」を踏まえて詠まれるが、古今集では「み山」と「外山」を対置した趣向を詠むが、経信は「み山」と「まさきのかづら」という歌語を援用しながら、発想を変え、「まさきのかづら」を「繰る」、「来る」の掛詞に転用したところに工夫が見られる。また、詞書の「山家旅寝といふ心を」という漢詩の浸透とその心を詠むという新風が認められる。この二首には、新奇な歌語と新しい発想をねらった意図が込められるように思われる。

二 二十三首の名所歌

これに連なるのは、二十三首の名所歌である。これらの名所を排列順に列挙したい。

- | | | | |
|---|------|--------------|--|
| ① | 一〇五三 | 勝間田の池 (範永) | |
| ② | 一〇五四 | 須磨の池 (経衡) | |
| ③ | 一〇五五 | 竜門の池 (定頼) | |
| ④ | 一〇五六 | 竜門の池 (弁乳母) | |
| ⑤ | 一〇五七 | 滝の糸 (兼房) | |
| ⑥ | 一〇五八 | 大覚寺の滝 (赤染衛門) | |
| ⑦ | 一〇五九 | 法輪 (道濟) | |
| ⑧ | 一〇六〇 | 大井川 (輔親) | |
| ⑨ | 一〇六一 | 束間の湯 (重之) | |
| ⑩ | 一〇六二 | 住吉詣 (御三条院) | |
| ⑪ | 一〇六三 | 住吉詣 (経信) | |
| ⑫ | 一〇六四 | 住吉詣 (兼経) | |
| ⑬ | 一〇六五 | 住吉詣 (兼長) | |
| ⑭ | 一〇六六 | 住吉詣 (棟仲) | |
| ⑮ | 一〇六七 | 住吉 (頼実) | |
| ⑯ | 一〇六八 | 住の江 (増基) | |

*池・滝・川・湯 九首

*住吉詣・住吉・住の江 九首

- | | | |
|---|------|--------------|
| ⑰ | 一〇六九 | 住吉 (赤染衛門) |
| ⑱ | 一〇七〇 | 住吉 (上東門院新宰相) |
| ⑲ | 一〇七一 | 天王寺参詣 (弁乳母) |
| ⑳ | 一〇七二 | 長柄橋 (公任) |

*長柄橋

三首

- | | | |
|---|------|------------|
| ㉑ | 一〇七三 | 長柄橋 (赤染衛門) |
| ㉒ | 一〇七四 | 長柄橋 (伊勢大輔) |
| ㉓ | 一〇七五 | 錦の浦 (道命) |

名所歌冒頭は、歌人集団、和歌六人党の藤原範永の次の歌である。詞書から、関白頼道邸における小歌合に歌枕の「勝間田の池」題で詠み競ったものであり、その先行例は万葉集に一例見られる。しかし、本歌に詠われた勝間田の池は、水鳥もいず、遙か昔に水の失われた池として読まれている。この空虚観は、後の西行や良経の歌のような自然の景にある池を幻視するような想像力豊かな歌境を生み出すことにもなる。後拾遺集雑歌に増大する名所歌の冒頭に、このような六人党のリーダー的役割を担う範永の勝間田の池を詠んだ歌を排したことは、撰者の「ひとへにかしき風体」をもたらず要因とも成りえたと考えられる。

次の一〇五四、経衡の「須磨の浦を」詠んだ歌は、古

今集にも二例（「わくらばにとふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶとこたへよ」雑下・行平、「須磨の海人の塩焼く煙風をいたみ思はぬかたにたなびきにけり」恋四・詠み人知らず）が認められる。古今集の例歌に比べると、この経衡歌は立ちのぼる藻塩の煙によって、空を眺めても須磨の浦の所在が判明するという、古今集の抒情性には欠けるが、伝統的な歌風をあえて転換させる手法をとって詠むという、当歌の「をかし」に注目した撰者の評価ともとらえられる。

続く次の二首（一〇五五・一〇五六）は、「竜門の滝」を詠む。

くる人もなき奥山の滝の糸は水のわくにぞまかせたり
ける （定頼）

ものいはば問ふべきものを桃の花いく代かへたる滝の
白糸 （弁乳母）

定頼詠は、仙境の滝を詠み、「滝の白糸」を中心にして、「糸」の縁語の「繰る・粹・巻かせ」に「来る・湧く・任せ」を掛詞にした手法が見られる。また、次の弁乳母詠は、「いく世か経たる滝の白糸」と表現したところが「をかし」な歌風と認められたのであろうか。

竜門の滝歌に続くのは、九首の摂津の歌枕である住吉・住の江の歌である。この住吉は、万葉集には、「須美乃江・

住吉・墨江」と表記され、「すみのへ」と訓まれていたらしい。平安時代に入り、「住吉」は「すみよし」と訓まれたということである。住吉の郷の入り江を住江と呼び、古今集以降は住吉・住の江の用例は多い。住吉は海辺の地であり、「土佐日記」にも詠まれ、忘れ草や松、神、浪が景物として詠まれている。その忘れ草は、万葉集では貝と共に詠まれたものが、平安時代には、「うち忍びいざ住の江の忘れ草忘れて人のまたや摘まむと」（拾遺・雑上・四六六・詠み人知らず）や「住吉の岸に生ひたる忘れ草見ずやあらまし恋は死ぬとも」（同・恋四・詠み人知らず）とあり、恋と人を忘れるための「忘れ草」と変わっている。

また、冒頭歌（一〇六二）はこの、後三条院御製が、延久五年三月に住吉に参詣した折の帰途に詠んだ歌とされ、本歌は、「栄花物語」三十八卷「松の下枝」の延久五年二月条にも見える。帰途の前に住吉社前で経信序の付された和歌御会が催され、当時兵部少輔であった撰者通俊も従駕しており、「いまはとて今日かへるさをいそげども心はとまる旅にもあるかな」を詠出している。この二か月後に上皇は崩御しており、通俊の記憶は鮮烈であったことを物語る。また、この後三条院唯一の和歌御会は、上皇が実務家の廷臣を率いて政教的な晴れの歌を詠むと

いう院政期歌壇のあり方を示す点で、和歌史上重要な意味をもつものであったとされる。住吉詠の初めにこうした背景の歌を排する意図を読みとることもできよう。

次の経信詠（一〇六三）も、前歌と同時の作である。

沖つ風吹きにけらしな住吉の松のしづ枝をあらふ白波

この後三条院の住吉行幸には御母陽明門院と一品宮聡子内親王も同行し、それらの従者や女房も交えて四十四首の和歌を記録する。そのうち御製と経信の歌のみを撰入している。ここで詠まれた歌のほとんどが行幸の寿ぎや住吉の神や松に御代万歳を詠む常套的なものだが、この経信の歌は、視覚や聴覚を駆使した壮大な叙景歌をなし、直線的で平明な、たけの高い歌として完成されている。また、当歌は経信の生涯の代表歌とされ、評価される。

兼経法師（一〇六四）、為長（一〇六五）歌に続くのが、和歌六人党の一員である棟仲（一〇六六）、頼実（一〇六七）の歌である。

忘れ草つみて帰らむ住吉のきしかたの世は思ひ出でも
なし

思ふこと神は知るらん住吉の岸の白波たよりなりとも

棟仲詠は、万葉集以来の恋の忘れ草として詠むが、平安時代になり、住吉、住の江と共に詠まれることが多くなる。次の頼実歌は、「袋草紙」雑談にその逸話を遺すよ

うに、名歌を詠むことを祈願して、住吉に参籠し、命に代えてもと明神に祈り願って、「木の葉散る宿はききわくことぞなき時雨する夜も時雨せぬ夜も」（冬・三六一）を得て、夭折したという。当歌もその折の歌であろうか。初句、二句の「思ふこと神はしるらん」、結句「たよりなりとも」とも符合するようにも思われる。また、この住吉歌九首中の三首が榮花物語に載る。

住吉歌に続く（一〇七一から一〇七六の六首）は、亀井一首（弁乳母）、長柄橋三首（公任・赤染衛門・伊勢大輔）、錦の浦一首（道命）、音無川一首（増基）を詠む。

一〇七一歌は、万代を住み継ぐ亀井の水の清澄さを讃え、亀万年の生命に基いて、富緒川の流れを汲むからなのだと詠う。長柄橋は、次の三首（公任・赤染衛門・伊勢大輔詠）である。

はしばしらなからましかば流れての名をこそ聞かめ跡
を見ましや
わればかり長柄の橋はくちにけりなにはのこともふる
るかなしな

いにしへにふりゆく身こそあはれなれむかしながらの
橋を見るにも

長柄橋は、摂津国の歌枕で、古今集「仮名序」に「ながらのはしもつくるなりときくひとは」とあり、「つくる」

は「造る」と「尽くる」の両説があり、幾度も架け替えられたようである。また、古今集では、「あふ事を長柄の橋のながらへて恋ひ渡るまに年ぞへにける」（恋五・是則）のように「ながらふ」を導き出す序詞の用法が見られる。続く、拾遺集では「蘆まより見ゆる長柄の橋柱昔のあとのしるべなりけり」（雑上・清正）と詠まれ、往時の名残を留める橋柱の風景がよく詠まれた。公任歌の長柄橋は、「なから」は「無から」「長柄」の掛詞とする。

二首目の赤染衛門詠は、当時朽ちてしまった橋の状況に自身の身の上になぞらえ嘆老した歌となっている。また、その詠風が、長柄橋が私ほどにと、比喻を逆点させたところに新しい趣向が見える。次の伊勢大輔の歌は、長元四年九月二十五日から十月二日にかけて、上東門院彰子が住吉・石清水へ参詣した折の詠で、しだいにと年をとっていく我が身の悲しさは、昔の名残のある長柄橋を見るにつけてもと、前歌と同様に老いを嘆いたものである。長柄橋という伝統的な歌枕の詠みぶりを、さらに自身に重ねて読むというあらたな試みが見られる。

次の道命法師詠（一〇七五）は、「にしきの浦といふ所にて」と詞書された、

名に高きにしきの浦をきてみればかづかぬあまはすく
なかりけり

が続く。この「にしきの浦」をよんだ例は、当歌の道命詠以前にはなく、錦の名称より「かづけ」物を連想させ、また「被く」、「潜く」の掛詞として、錦の浦に潜く海人を詠う。それまで作例の認められなかった錦の浦をここに布置した撰者の試みを感じさせる。

この後は、八首の物詣の歌が並ぶ。順にその地をあげると、音無川（増基）、住吉（孝善）、賀茂（詠み人知らず）、木綿禰（詠み人知らず）、賀茂の社（安法）、朝倉（詠み人知らず）、木の丸殿（実方）、木の丸殿（赤染衛門）となっている。その冒頭は次の増基法師詠で、

山がらすかしろもしろくなりけりわがかへるべきと
きやきぬらん

作者が熊野社に参詣し、明日帰途につこうとしていたところ、人々が引きとめなどした際に、音無川のあたりに、頭の白い鳥がいたので詠んだという長文の詞書を持つ歌である。燕の太子の丹が秦に人質とされた時、秦王に鳥の頭が白く変わったら帰つてよいと言われ、嘆いていたところ、鳥の頭が白く変わったという故事（史記）に基づいて詠んでいる。この音無川は、熊野本宮の脇を流れる川で、その旧社は音無川べりにあったという。こうした故事を踏まえた詠風は、機知的なおもしろさを感じさせ、物詣歌の初めに置いた撰者の意図も認められよう。

これに続くのは、孝善歌（一〇七七）で、この歌も詳細な詞書を持つ。

わかれゆくふねはつなでにまかすれど心はきみがかたにこそひけ

詠歌事情は、住吉に参詣して帰る折、隆経朝臣が難波にいと聞き立ち寄り、数日遊び上落したが、名残り惜しいと言つて寄こしたので、道中から詠み贈つた歌である。前歌とは、帰途詠であることで連接する。本歌は別れ難き心を、船の綱手に寄せて詠み、以上畿内を中心とする物語歌は終わる。

続いて詠み人知らずの贈答歌（一〇七八・一〇七九）と安法法師（一〇八〇）詠が排列される。

この贈歌は、詞書から賀茂神社の参詣の折、男の狩衣の袖が綻びているのを見て、女が戯れによんだ歌（「みちすがらおちぬばかりにふるそでのたもとになにつつむなるらん」と解釈するのがよからう。古今集、雑上、詠み人知らずの「うれしきになにつつまむ唐衣たもとゆたかにたてといはましを」を踏まえているとされ、道中落ちてしまうほどに振れる袖の袂には、何を包み入れているのでしよう）と擲楡に似た感情を詠う。この歌に対する返歌（ゆふだすきたもとにかけていのりこし神のしるしをけふみつるかな）、初句「木綿襷」は、木綿で作った

襷で神事の折、肩に掛け袖を絡げるもので、平安時代以降に用例は多く、「搔く」「懸く」に掛ける枕詞としても使われた。また、「ちはやぶる賀茂の社の木綿だすき一日も黄味をかけぬ日はなし」（古今集・恋一・詠み人知らず）や「ゆふだすきかけてもいふなあだ人の葬てふ名はみそぎにぞせし」（後撰集・夏・詠み人知らず）のように神祇や神楽歌だけでなく、四季歌や恋などにも詠まれている。当歌は、木綿襷をかけて祈つた神の靈験が、今日報われたと詠み、思いもかけない神の靈験を戯れている。歌中の「たもとのおちぬばかりのほころび」と、「ゆふだすきたもとにかけて」という対照にユーモラスなおかしみを感じさせる。「木綿襷」歌の三首目は、安法法師の「ととのへしかものやしろのゆふだすきかへるあしたぞみだれたりける」という詠歌で、昨日の賀茂祭に木綿襷を掛け、真面目顔で神前に額づいた者たちが、振舞い酒に酔いしれて醜態をみせている者たちへのからかいの歌とする。以上三首で賀茂神社詠は閉じられる。

次の二首（一〇八一・一〇八二）は、実方朝臣が女の許へ来て、荒々しい対応をしたので、帰ってしまったので、その翌朝女に詠み贈つた歌の「あけぬ夜のこちながらにやみにしをあさくらといひし声はきききや」で、黙って帰ってしまった男に対して「あさくら」という歌

語を用い、答めた詠みぶりに対し、その「をかしき」に対して撰者道俊は評価して配置せしめたのか。また、その返歌は、実方の「ひとりのみ木のまる殿にあらませば名のでやみにかへらましやは」という歌で、「俊頼髓脳」には来訪者には必ず名のらせたという伝承を引き、それを本に、木の丸殿を詠む時は、「名のる」という言葉と併せて詠むことを解説する。

この後は、歌集に関する五首の歌群（一〇八四から一〇八九）で、故人の詠草の読後感などが詠まれる。歌群最後の、後三条院越前の「いにしへの家の風こそうれしけれかかる言の葉ちりくと思へば」は、歌よみとして扱われた喜びを詠う。撰者と伊勢大輔の血縁の家系の称場にも繋がる。また、これらの排列は、後撰、拾遺、当代という時代順になっている。

三 卷末の日常消息的歌群

この「雑四」の卷末には、九首（一〇九〇から一〇九八）の日常消息的歌群を置いている。九首のうち、五首が女性歌人詠であるのも注目される。また、いずれにも詳細な詠歌事情が付され、詠歌の場と密接な関わりを持つ歌のように思われる。

その冒頭には、後三条院の次の歌を載せる。

秋風にあふことのはや散りにけむその夜の月のもりにけるかな

この歌は、詳細な詞書から、廷臣である藏人公俊と女房の情事の噂を聞き、そのことをからかって詠んでいる。初句の「秋風にことのはや散りにける」は、秋風に出会って木の葉が散ったように、二人があつたことが世間に知れてしまったと詠んでいる。秋風・木の葉・月という季節に託しながら、軽く揶揄したような諧謔性を持つ歌である。

この後、卷末まで恋歌的詠歌が並列されている。まず、赤染衛門歌「まことにや姨捨山の月は見るよもさらしなと思ふわたりを」（一〇九二）は、信濃国の歌枕の姨捨山を用いて、伯母を暗示したり、「さらしな」に「去らしな」を掛け、姥から姪への心変わりを咎めた歌、続いて友情を摂津国の歌枕の水無瀬川に託して詠み、この歌も前歌と同様に縁語や掛詞を駆使して詠んでいる。

次は、規子内親王歌（一〇九三）で、姉の村上天皇女三宮の保子内親王からの歌に答えた歌「いはぬまはつつみしほどにくちなしは色にや見えし山吹の花」で、「岩沼・言わぬ間」、「堤・慎み」、「梔子・口無」という機知に富んだ発想と技巧の粋を凝らした詠みぶりとなっている。ま

た、異母姉妹である二人の情愛が響いてくる。この両者の歌は、古今集の素性法師の俳諧歌の「山吹の花色衣主やたれたれ問へどかたへず口なしにして」を踏まえる。

前歌に続き、友情に通じる歌となっている。俳諧的なおかしみの歌に繋がる要素を認めることもできようか。

この友情に続く歌は、当代歌人の孝善詠で、この歌も前歌と同じく古今集、雑上、詠み人知らず歌の「うれしさを何につつまむ唐衣たもとゆたかにたてといはましを」を踏まえ、古今集以来の、うれしきは袂に包むものという趣向にそって詠まれ、逢いにくい人と対面できた喜びを詠う。

これに続くのは、和泉式部の歌（一〇九五）で、詞書からかねて交際していた男が、他の女の所に遣る代作歌を求めてきた時の歌とし、「まづわが思ふことをよみ侍りける」とある。注目すべきは、結句「恋のまぎれ」という新造語を用い、浮気な恋に目先がわからなくなるという意を込め、男への皮肉をにおわせた絶妙な表現が光る。

一〇九七番歌は、馬内侍の「うかりける身のうの浦のうつせ貝むなしき名のみ立つは聞ききや」で、事実無根の噂を恋人に嘆いたもので、「みのうの浦」という比較的新しいとされる筑前国の歌枕の、「みのう」に「身の憂」を掛け、さらに「うつせ貝」の身が抜けてしまつてから

になった作者自身の心の状況をも重ねている。そのうえ上三句は、四句の「むなしき」に掛かる有心の序詞となり、下句はつれない男に対して自身の身の潔白を訴える手法となっている。

以上のような「雑四」を締めくくる巻末歌は、当代歌人の頭綱朝臣の次の歌である。

御贖物の鍋あかもを持ちて侍りけるを、大盤所より人の
乞ひ侍りければつかはすとて、鍋に書き付け侍り
ける

おぼつかな筑摩の神のためならばいくつか鍋の数はい
るべき

この歌は、滋賀県の筑摩神社の祭りで行われる、女性
が関係を持った男性の数の鍋を奉納するという、いわゆる
「筑摩鍋」の奇習を踏まえたもので、最も古い例は
「伊勢物語」、一二〇段の「近江なる筑摩の祭とくせなむ
つれなき人の鍋の数見む」である。これ以降は、この歌
を本歌として詠まれたようで、その始めが当歌で、その
後の用例は認められない。この贖物鍋を注文した女房へ
のからかいたとも諷刺とも読めるこの歌をもつて「雑四」
の幕を閉じるのである。この巻末歌九首は、日常消息的
な詠風を集めた歌群で、伝統的な歌を踏まえながらもさ
らに後拾遺集独特な手法を用いたものや、斬新な趣向や

新造語を用いた歌が認められるように思われる。長文的な詞書によって、詠われた場や人間関係の明示が歌と密接に関わり、詠みを限定させるといふ物語的要因へと繋がったともいえよう。こうしたことから撰者の庶幾した新風への一端が見えてくるようでもある。

まとめ

後拾遺集全六巻の雑歌の内容は、雑一は述懐・懐旧を主題とした歌群、雑二は恋歌的な歌群、雑三は述懐・慶祝・哀傷的な歌群、雑四は羈旅的な歌群・日常消息的な歌群、雑五は賀的で対人関係に纏わる年中行事・法会などに際しての歌、雑六は、勅撰集で最初の神祇・釈教・俳諧歌という部立によって分類される。これらはおおよそ古今集以下の構成の規範に拠るところが多いが、単に踏襲という側面だけではなく、後拾遺集独自の、新たな試みのひとつとしての編纂意識も合わせ持っていたと思われる。雑歌が、単なる「余りの歌」として雑然と並べられているのではない。そこには古代和歌終焉という時期における新機軸への課題が見えてくるように思う。

「雑四」の五十八首の雑歌は、撰者通俊によって工夫を凝らされた排列と新たな特性を見出し出すことができる。

それは、特にこの「雑四」に増大する名所歌に注目できるように思う。それは、古人によって詠まれた伝統的な地名や歌枕という和歌世界に呼び起される風景のイメージを基にして、さらにもう一度詠者自身の眼で捉えなおすという現象である。眼前の風景を直截的に詠むだけでなく、そこに自分を置くことによって見えてくる創造的和歌世界への広がりこそ、後拾遺集の特性として捕えられると思う。そこに大きな効力をもった歌人が、能因法師や相模であり、単に四季歌や恋歌だけでなく、この雑部の内容をも更に拡大せしめたという点にある。

また、後半部の恋歌的雑歌群には、かなり長文化された詞書が付される。この傾向は、雑歌の特徴のひとつだが、「雑四」には、それが認められる。詠歌事情という詞書に示される場や人間関係という限定された条件が、歌と不即不離の関係を有し、歌にある限定した詠みを許容することになる。それが密接に結びつくことで見えてくる人間模様にも、ざれ歌的な滑稽味を感じさせるようでもある。また、そこには、独特な用語や新造語が使用されたり、斬新な修辭が用いられていることも注目される。また、漢詩の浸透における題詠歌の「ここを詠める」は、四季歌だけでなく雑部にも見られることも興味深い点である。

考察してきたこの五十八首の「雑四」という巻を、雑歌全六巻の中央に布置させた撰者の意図とはどのようなものであつたらうか。歌群内の歌の排列はけつして整然としていたとは言いが、おおよそ次のようにも捉えられるのではないだろうか。冒頭の松歌群には、長寿や不変性を象徴する松が、時代の変遷や人の変化によつてもたらされる無常感にも似た感慨を覚え、続く「深山(木)」への思いを馳せることで、歌枕や名所への憧憬を抱き、その和歌世界を古人と共有する中で、新たなことばによる創造的世界を生み出している。

そして、それは宗教に抛る人間的な救済をもたらず物詣歌群へと移行し、人間世界における主たる感情世界を中心である日常消息の世界の恋歌的歌群へと連なつていく。その歌群との連接にも撰者は少なからず意を注ぎ、苦心の跡も見られる。

通俊は、自らの家集も持たず、歌作は四十数首を遺すのみという実績の少ない人物であり、撰者であることへの世の不満はあまりあつたものと思われる。しかし、実際、どのような歌を撰び、それをどのように分類、排列し、第四勅撰集として成立せしめたのかという観点から見ると、この雑歌中の「雑四」という巻には、通俊の確かな和歌への見識が認められるのである。また、雑歌六

巻というそれぞれの構成には、通俊の優れた和歌観が見えてくるのである。

注

1 武田早苗氏「後拾遺和歌集の四季部・恋部の構成について」(横浜国大國語研究・昭和59・3)

松本真奈美氏「後拾遺和歌集雑部に関する試論——雑歌の分類意識をめぐつて——」(お茶の水女子大・國語国文68号・昭63・1)

2 田中恭子氏「江侍從伝新考」(國語と國文学 平3・3)

3 井上宗雄氏「再び心を詠めるについて——後拾遺・金葉集に見られる詞書の一傾向」(立教大学日本文学三九号 昭52・12)

4 拙稿「後拾遺和歌集『名所歌』小考」(文藝論叢・28号・平4・3)

5 「歌ことば歌枕大辞典」(角川書店・平10・10)
井上宗雄「院政期の考察——延久より久寿に至る——」(國文学研究 昭34・3)、橋本不美男「院政期の歌壇」(講座日本文学 中古 編 昭43)

(本学教授)